

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月2日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730519

研究課題名（和文） 不作為の認識と実行に関する発達心理学的研究

研究課題名（英文） Developmental psychological study about understanding and doing omission

研究代表者

林 創（HAYASHI HAJIMU）

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：80437178

研究成果の概要（和文）：

本研究は、人間の行動の「不作為」に着目し、不作為の認識や実行に関する発達を明らかにすることを目的とした。研究の結果、認識面については、作為と不作為を比較すると前者の方がより悪く感じる不作為バイアスが発達の的に明確になった。また、実行面については、5歳になると通常のだましを柔軟にできるようになった。しかし、不作為の要素を含むだましは6歳でもまだ難しく、全体的に不作為の難しさが明確になった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of the present study was to clarify the development about understanding and doing omission. The results revealed that children showed omission bias, which was the tendency that people judge acts of commission as morally worse than equivalent acts of omission. Furthermore, 5-year-olds deceived in the usual situation, but most 6-year-olds could not deceive in the situation relevant to omission. Overall, omission may be some difficult for children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：認知発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：作為，不作為，認知発達

一般に、私たちの「悪い行為」には、動作や言葉といった言動が伴っているが、言動が伴ってなくても悪い場合がある。たとえば、川で溺れている人を助けずに立ち去った場合、「（溺れているのに）何もしない」という動きのない行為に対して責任が問われるはずである。「刑法」の言葉を借りれば、これらは「作為」と「不作為」に相当する。

不作為は身近なものであり、私たちは頻繁に、他者の不作為を見抜いたり（「認識」したり）、自分たち自身でも不作為を行っており（「実行」している）、心理学的に重要な意味を持つ行為である。ところが、言動がないことでその存在を見落としやすく、作為と比べて実証的な研究が進んでいなかった。特に発達心理学的研究では、実験場面での課題状況を子どもに分かりやすくする必要性もあり、言動が伴わない不作為は扱われていないのが実情であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、不作為を「認識」する面の発達過程をさらに掘り下げて検討するとともに、新たに「実行」する面にも着目し、研究を発展させることを目的とした。

また、不作為の認識と実行の両面を検討する上で、「実行機能」とも関連づけて検討することにした。実行機能とは、目標に達するための行動や思考について調整やコントロールを行う機能の総称で、下位分類に衝動的反応をコントロールする「抑制機能」があり、これが心の理論をはじめ、多くの認知能力の発達と関連することが先行研究で報告されていたためである。

## 3. 研究の方法

第1に、不作為の認識面については、過去の私の研究成果をさらに展開し、不作為バイアスを調べる研究を行った。具体的には、これまでの研究の流れを踏まえるため、2つの類似したお話を比較させる形式とした。お話①とお話②で構成され、一方のお話は「男の子が何かをする（言動あり：作為）」ことで、もう一方のお話は「何もしない（言動なし：不作為）」ことで、どちらも男の子が何らかの得をするお話とした。行為を生み出した男の子の心的状態（意図）や生じた結果は、2つのお話のそれぞれで同じ文によって表現し、同等とした。

道徳判断質問では「どちらの男の子がより悪いことをしましたか？」と聞いて、作為のお話の方がより悪いことをしたと答えた場合、不作為バイアスが生じたと判定し、年齢ごとに、その割合を算出した。また、意図質問として、どちらの男の子がより強い意図を有していたかを尋ねた。選択肢は「お話①の男の子、お話②の男の子、どちらも同じ」の3つだった。

第2に、不作為の実行面については、ハンドパペットを用いて、幼児の前で実演する形で行った。直接的なだまし条件に加えて、不作為の要素が入る非直接的なだまし条件を設けた。また、合わせて、抑制制御に関する実行機能課題も実施した。

## 4. 研究成果

第1に、不作為の認識面については、児童期の子どもに加えて大人を対象とした調査の結果、不作為バイアスの出現を明らかにするこ

とができた。具体的には、不作為バイアスは、児童期の7歳頃から強く見られ、大人と同程度の強度を持っていることが明らかになった。

また、意図質問の正答は課題の設定上「どちらでも同じ」はずであるが、道徳判断質問と同様の選択をした割合が高く、道徳判断で選ぶ方向に意図が歪んで解釈されていることが明らかになった。

第2に、不作為の実行面については、4歳～6歳を対象としたデータを得ることができた。その結果、4歳では、直接的なだましと非直接的なだましのいずれも実行が難しかったが、5歳になると、直接的なだましを柔軟にできるようになる傾向が見られた。ただし、非直接的なだましは、6歳においても難しかった。また、だましの実行と実行機能の課題の成績の間に関連がある傾向が見られた。ただし、課題状況のわかりにくさという問題も残っており、この点は、今後の課題として残された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① Hayashi, H. (2010). Young children's moral judgments of commission and omission related to the understanding of knowledge or ignorance. *Infant and Child Development*, 19, 187-203.  
(査読有り) DOI: 10.1002/icd.641

- ② Hayashi, H. (2009). Is there a developmental difference in recognizing harm through action and inaction (commission and omission) based on first-order mental states? *Psychologia*, 52, 209-218.  
(査読有り) DOI: 10.2117/psysoc.2009.209

- ③ 林 創 (2011). 子どもの道徳判断の発達をどうとらえるか —よりよい教育につなげるために— 発達 (ミネルヴァ書房), 127, 18-25. (査読無し)

- ④ 林 創 (2009). 作為と不作為の比較に関する認知発達 —不作為に対するバイアスの変化— 発達研究, 23, 143-152. (査読無し)

- ⑤ 林 創 (2011). 心の理解の発達に関わる概念変化と文化的影響 —内藤論文へのコメント— 心理学評論, 54, 264-267.  
(査読無し)

- ⑥ 林 創・今中菜七子 (2011). 幼児期における他者の心の理解の発達 —イラストのロボットを用いて— 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 148, 69-75. (査読無し)

- ⑦ 林 創 (2010). 学生および教員自身の授業評価はどの程度一致するか? 京都大学高等教育研究, 16, 73-81. (査読無し)

[学会発表] (計 11 件)

- ① Hayashi, H. (2009). *Omission bias and intention in Japanese people*. Poster presented at the 31th Annual Conference of Cognitive Science Society, Amsterdam, The Netherlands. (2009/07/30)
- ② Hayashi, H. (2009). *Developmental differences in moral judgment between commission and omission*. Poster presented at the XIVth European Conference on Developmental Psychology, Vilnius, Lithuania. (2009/08/21)

- ③ 林 創 (2009). 不作為バイアスと意図の強さの認識 日本心理学会第73回大会論文集, 925. (立命館大学) (2009/08/27)
- ④ 林 創 (2009). 学生と教員の授業評価はどれくらい一致するか? 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 490. (静岡大学) (2009/9/21)
- ⑤ 林 創 (2010). 一次的信念の理解以降の心の理論と実行機能の関連—社会的知能が働いていくために— (シンポジウムでの話題提供) 日本発達心理学会第21回大会. (神戸国際会議場; 主催関西エリア連合) (2010/3/27)
- ⑥ Hayashi, H. (2010). *Moral judgments and omission bias in elementary school children.* Poster presented at the EARLI (European Association for Research on Learning and Instruction)-SIG5 conference: Learning and Development in Early Childhood, Luzern, Switzerland. (2010/08/24)
- ⑦ 林 創・今中菜七子 (2010). 幼児期における心的状態の理解の発達—人間とロボットの比較— 日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 566. (早稲田大学) (2010/08/28)
- ⑧ 楠見 孝・子安増生・道田泰司・林 創・平山るみ・田中優子 (2010). ジェネリックスキルとしての批判的思考力テストの開発—大学偏差値, 批判的学習態度, 授業履修との関連性の検討— 日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 661. (早稲田大学)

(2010/08/29)

- ⑨ 林 創・今中菜七子 (2010). ロボットの作為と不作為に対する子どもの認識 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1116. (大阪大学) (2010/09/21)
- ⑩ 林 創・瀬野裕子 (2011). 児童期における感情表出の理解 日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 384. (北翔大学) (2011/07/25)
- ⑪ 林 創(2011). 幼児期における他者を助ける場面での欺きの発達 日本心理学会第75回大会論文集, 1083. (日本大学) (2011/09/16)

[図書] (計6件)

- ① 清水由紀・林 創 (編) (2012). 他者とかかわる心の発達心理学—子どもの社会性はどのように育つか— 金子書房  
総ページ数215
- ② 井上智義・山名裕子・林 創 (2011). 発達と教育—心理学を生かした指導・援助のポイント 樹村房  
総ページ数184
- ③ 山田剛史・林 創 (2011). 大学生のためのリサーチリテラシー入門—研究のための8つのカー ミネルヴァ書房  
総ページ数256
- ④ 林 創 (2010). 心の理論, レジリエンス 森 敏昭・淵上克義・青木多寿子 (編) よくわかる学校教育心理学 ミネルヴァ書房 pp. 104-105, 122-123.
- ⑤ 林 創 (2011). 認知発達の研究課題と研究

法 岩立志津夫・西野泰広（編） 発達科学  
ハンドブック第2巻 研究法と尺度 新曜社  
pp.110-121.

- ⑥ 林 創 (2012). 授業評価における学生と教  
員の評定のズレ 大塚雄作・松下佳代（編）  
生成する大学教育学 ナカニシヤ出版  
pp. 223-225.

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

とくになし

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

林 創 (HAYASHI HAJIMU)

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：80437178